

1.1 神学部

1.1.1 理念・目的・教育目標

【評価項目 0-0-1】 理念・目的等

(必須要素) 大学・学部等の理念・目的・教育目標とそれに伴う人材養成などの目的の適切性

(必須要素) 大学・学部等の理念・目的・教育目標等の周知の方法とその有効性

【評価項目 0-0-2】 理念・目的等の検証

(選択要素) 大学・学部等の理念・目的・教育目標を検証する仕組みの導入状況

(選択要素) 大学・学部等の理念・目的・教育目標の、社会との関わりの中での見直しの状況

【評価項目 0-0-3】 健全性・モラル等

(選択要素) 大学としての健全性・誠実性、教職員及び学生のモラルなどを確保するための綱領等の策定状況

<2003年度に設定した目標>

神学部は、「キリスト教の伝道に従事すべく選ばれた者を鍛錬する」(関西学院創立時制定の「憲法」第二款「目的」)ことを理念とし、これに則って、キリスト教神学の基礎と専門領域双方の教育を行う。その目標とするところは、人間を自然と社会、思想と文化との関わりにおいて考察し、そこにある問題を探り出し、今日における生の意味や生きることの規範を見出して、それをキリスト教の福音に基づいて広く他者に伝え、社会に奉仕する人材を育成することにある。

神学部の専門領域は、伝統的なキリスト教神学と、これらと密接な関連をもつ学際的研究領域から成り立っているが、神学部はキリスト教神学を聖書学(旧約聖書学・新約聖書学)、歴史神学、組織神学(宗教哲学を含む)、実践神学の4つに構成している。

さらに2004年度から、神学部存立の理念をより拡大し、社会の要請に応えることを意図して、キリスト教が人類の歴史の中で生み出してきた思想および文化的財に関する学際的な研究領域として、キリスト教思想、キリスト教文化のカリキュラムを設けた。

当面の目標は、この新たな分野での人材育成を実現させることであるが、これに加えて以下の点を、教育目標および人材育成の目標とする。

1. 基礎学力の錬成

キリスト教に関する基礎的な知識を修得する。

2. 全人的教育による対話能力の育成

少人数の授業によって、学問研究の基礎を学ぶと共に、人間関係を築き、担当教員との人格的なふれあいを通して、人格の陶冶を目指す。

3. 健全な社会人の育成

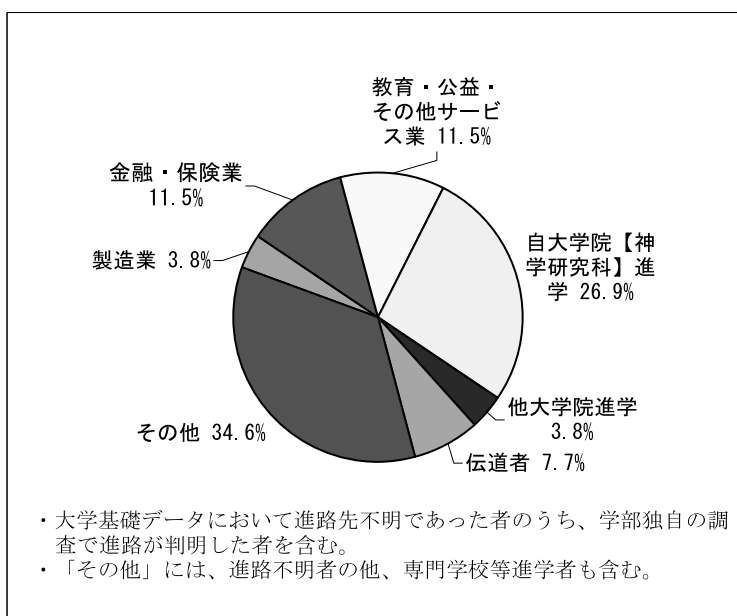
キリスト教全般にわたる基礎知識に裏打ちされ、しかも、現代の社会と人間に対する洞察力を持ち、明確な人権意識を持って、柔軟に思考することのできる職業人を育成する。

(現状の説明)

神学部は、大学という基盤に立ったプロフェッショナル・スクール(日本基督教団認可

神学校)として教職並びにクリスチャンワーカー育成機関との重責を担うにふさわしい聖書的、神学的思考力の錬磨と旺盛なミッション精神の涵養を進めている。同時に、クリスチャンワーカーとして教育や社会福祉その他の幅広い領域においても、重要な働きをする人材を育成している。また、一般企業に就職して、キリスト教精神の下、社会に奉仕する道を選ぶ者もある。卒業生は2004年度までで712名を輩出しており、日本のみならず時には海外の教会やキリスト教関係団体でも伝道者としての働きを行っている。2004年度の卒業生の進路状況は次のとおりである。

＜2004年度進路状況＞



時代の推移と状況の変化に伴い、神学教育の内容も課題も広がってきた。環境、人権、福祉、カウンセリングなどの諸領域、人間と人間を取り巻く社会や環境の現実と結びついた問題にも取り組む必要がある。開かれた神学部の教育研究を実行するために、まず2004年度から入学定員を10名増の30名とし、履修コースとしてキリスト教思想・文化コースを導入した。これにより、バプテスマ（洗礼）を受けていない学生を受け入れ、現実の社会や学生の要請に応えるとともに、社会に広く奉仕できる人材の育成を進めているところである。

神学部では、神学教育・伝道者育成は、大学院神学研究科前期課程との6年一貫教育によって行われるべきものと考えており、同研究科との緊密な連絡の下にカリキュラムを編成している。伝道者となることを志望する学生には、大学院に進学することを強く促しており、その結果、神学研究科への進学率は次のように高くなっている。

＜大学院神学研究科博士課程前期課程進学者数とその割合＞

卒業年度	卒業生数	本学大学院神学研究科進学者数	割合
2004年度	26名	7名	26.9%
2003年度	23名	9名	39.1%
2002年度	15名	10名	66.7%

*2004年度大学院神学研究科進学者数には、大学基礎データにおける進路先不明者（1名）を含む。

<学部卒業後、伝道者（伝道師、宗教科教師など）となった者の数とその割合>

卒業年度	卒業者数	伝道者となった者の数	割合
2004年度	26名	2名	7.7%
2003年度	23名	0名	0.0%
2002年度	15名	1名	6.7%
2001年度	16名	2名	12.5%
2000年度	15名	1名	6.6%

<大学院神学研究科博士課程前期課程修了後、

伝道者となった者の数・そのうち院内進学者数とその割合>

修了年度	伝道者となった者の数	左のうち、院内進学者数	割合
2004年度	7名	6名	85.7%
2003年度	5名	5名	100.0%
2002年度	11名	8名	72.7%
2001年度	10名	7名	72.7%
2000年度	10名	10名	100.0%

神学教育の理念・目的・教育目標等は、大学案内、大学要覧や神学部のホームページにより周知している。

理念、目的等について特に検証の仕組みはない。しかし、カリキュラム編成時において、その方針が、社会の動きや学生の関心状況等を勘案しつつ、理念・目的・教育目標に照らして検討を行いその具現化を果たすよう、カリキュラム研究委員会を経て、教授会で十分な議論を尽くしている。また、同窓生、ことに伝道者となった同窓生や、教会関係者からのフィードバックは、様々な機会に受けており、これによって、神学部の教育を検証する機会としている。

教職員や学生のモラルについては、毎日の礼拝における奨励をとおして、確保をはかっている。神学部独自の綱領等は制定していない。教職員は就業規則があり、学生は学則によって必要な事項は規定されている。さらに、入学時に人権講演会、春学期中に全学生対象の人権研修会、教員対象の研修会を学部主催で開催し、人権意識の向上に努めている。

(点検・評価の結果)

混迷を深める時代にあっても、創立当初の神学部の理念・目的・教育目標は変わることなく継承している。大学院に進学してさらなる研究を経て、伝道者になる学生が多数あり、キリスト教の伝道者を育成するとする神学部の理念・目的・教育目標は実現されていると言える。

同時に、多様化した社会構造、価値観のなかで神学教育上の配慮すべき課題として、キリスト教を現代に意味あらしめるために、思想、文化、歴史に対する学問的研究を深めると同時に、現実の教会と社会に関わる新しい神学教育の在り方を検討してきた。その具体的帰結として「キリスト教神学・伝道者」コース、「キリスト教思想・文化」コースを

2004年度に設け、1年が経過したところである。特に問題を生じることもなく順調に経緯している。より専門化が進む3年以降の状況を把握する必要がある。

神学部の理念・目的・教育目標は、関西学院創立以来継承されているため十分に周知されているものと考えているが、神学部のホームページや大学案内などの充実を図ることを、継続的に検討しなければならない。

(改善の具体的方策)

キリスト教の現代化を進めていく必要がある。そのため、理念・目的・教育目標についてはこれを堅持し、さらに発展させなければならない。キリスト教が世界の思想・文化に与えた影響に鑑みると、人格形成に欠かせない教養の一つであるので、キリスト教思想・文化の研究領域を拡充し、歴史、文化、社会等を通して基礎的な知識を学修させていくことが課題となる。また、神学部を除く他学部の学生に対しても、学部宗教主事との共同研究を通して、本学の教育目標の基礎となるキリスト教主義教育の内実化を図らなければならない。